

学術用語としての感情概念の検討¹

－心理学における表情研究を例に－

中 村 真

はじめに：本研究の目的

心理学の分野で最近出版された感情研究の入門書によると、感情とは、「自分自身を含めてあらゆる対象について、それが良いものか悪いものかを評価したときに人間に生じる状態の総体ということになる（大平、2010）」。これをさらに生物学的に表現すれば、感情は進化の産物であり、生き残りのために迅速な行動をとるための評価と適応のシステムである。あわせて、感情にはその反応様式として3つの側面、すなわち心拍や呼吸、血圧の変化のような感情の生理的、身体的実現である生理的反応、表情や声などの変化である表出行動、嬉しい、悲しいというように自分の感情を自覚する主観的体験があると考えられている。しかし、感情についてのこのような説明は心理学における唯一のものではなく、例えば、文化研究を志向する研究者ではむしろ、文化による感情の多様性や独自性を強調する（例えば、北山・内田・新谷、2007）。

「感情 (emotion)」という概念自体に多様性・あいまいさがあることは歴史的にも繰り返し指摘され、検討されてきた (e.g. 藤田、2007; Izard、2010)。現在、「パラ言語情報および非言語情報の研究における基本概念の体系化」という国立国語研究所共同研究プロジェクト（代表者：森大毅）が実施されており、主に工学と言語学、心理学に関わる研究者が、音声研究をテーマにした領域を中心に、感情を含む非言語情報やパラ言語等の基本概念の整理と学際的な共有のための検討を進めている。これまでの検討の結果、これらの研究分野に限っても、基本概念は必ずしも明確ではなく、共有されているとは言い難い。実際、心理学分野の日本語による文献に限っても、教科書、専門書、事典などに「感情」やその関連語の定義が項目としてまとめられているが、その内容はさまざま

あり、後述するように、極端な例では一つの出版物の中で矛盾した説明が見受けられることもある（中村、2011）。

本稿では、まず心理学における日本語による感情概念の一般的な定義について検討し、その現状と課題を確認する。ついで、感情研究の中心分野の一つである表情をテーマにした実証的研究において、感情概念がどのように使用されているかを検討する。このような検討を通じて、筆者の専門分野である心理学において、感情概念が実際にどのように定義され、用いられているかを吟味し、関連概念の整理を行うことは、他の研究分野における感情概念との比較や今後の感情研究の発展に貢献するための第一歩として重要な意味をもつと考えられる。実際、「感情」は人間を特徴づける重要な側面であり、心理学はもとより、哲学、文学、文化人類学、社会学、経済学、法学、神経科学、工学、コンピュータ・サイエンス等、様々な分野で取り上げられる重要な研究テーマであり、国際感情学会（ISRE: International Society for Research on Emotion）のような国際的な学術団体においても、学際性は最も重視される感情研究の特徴である。

なお、本稿ではここまで「感情」という用語を用いて記述してきたが、心理学の文脈においては、おそらくそのほとんどすべてを「情動」に置き換えることができる。このことは、まさに感情概念のあいまいさを体現していると言えるが、ここでは感情や情動に関わる現象を総称する用語として「感情」を用いることにする。

I 定義の検討：現状と課題

この節では感情概念の一般的な定義について確認するため、出版からやや年月を経ているが、心理学における最も包括的な事典一つである「心理

学事典」(平凡社、1995)(以下、「心理学事典」)と、感情をテーマにした学術書における説明をいくつか取り上げて検討する。

1. 感情と情動の定義

「心理学事典」には、愛情、愛着、不安、期待、興味、動機づけ、攻撃行動、表出など、感情に関係した様々な概念が大項目として取り上げられているが、ここでは「感情」と「情動」について検討する。

「感情」については124～126頁にかけて説明があり、英語の *Feeling* が訳語とされている。項目の導入部分には、感情という概念があいまいで混乱しているのが現状と説明されている。続いて定義があるが、その一部を抜粋して引用する。

【感情の定義】 広義には、感情とは経験の情動的あるいは情緒的な面をあらわす総称的用語である。しかし、*feel*、*fühlen* というような英語およびドイツ語の表現が示すように、皮膚感覚的な感じというように狭義に考えて、むしろ情動あるいは情緒 *emotion* を上位概念とする考え方もある。さらに、わが国では英語の翻訳にさえ意見の一致が見られていないものがあり、たとえば矢田部達郎は *emotion* を情緒と訳し、*affection* を情動と訳したが、最近では *emotion* を、*motion* という言葉の含みを重視してか情動とよぶことが一般化してきている。・・・(中略)・・・感情は情緒と部分的に重複している面も多いが、一般には情緒(情動)は急激に生じ比較的激しい一過性のものであるのに対して、感情は感覚や観念、心的活動に伴って生じる快-不快の意識状態と定義され、情緒(情動)に比べて穏やかで比較的持続的なものと考えられている。・・・(後略) (「心理学事典」より引用)。

この定義によると、感情は経験の情動的、情緒的な面をあらわす総称的用語であり、引用文の末尾にあるように意識状態を指すことになる。また、感情と情動との関係については、強度と時間特性における量的な違いであり、質的な違いの有無については必ずしも明確ではない。また、引用文において注意すべき点の一つは、前半では情動を上位概念とする考え方もあるとしている点であり、以下に取り上げる「情動」の定義と矛盾する一面

をもっていることである。

「情動」については377～379頁にかけて説明があり、英語の *Emotion* と対応付けられている。この項目では冒頭で定義が述べられているので、導入部を抜粋して引用する。

情動あるいは情緒は、急激に生起し、短時間で終わる比較的強力な感情であると定義される場合が多い。情動は主観的な内的経験であるとともに、行動的・運動的反応として表出され、また内分泌腺や内臓反応の変化などの生理的活動を伴うものである、より広義の意味を含む感情と明確に区別することはむずかしい。ワトソンは基本情動として、怒り、恐れ、愛の3つを上げている。またシャンドは基本情動として恐怖、怒り、喜び、驚き、反感、憎しみをとりあげ、プルチックは後述するような進化論の立場に立って、受容、嫌悪、怒り、恐れ、喜び、悲しみ、驚き、期待の8つの純粹情動をあげている。・・・(後略) (「心理学事典」より引用)。

ここでは、感情の項目と同様に強度と時間に言及しており、感情との関係で、情動を急激に生起して短時間で終わる強度の強い感情であると定義している。「感情」との違いに注目すると、情動は行動的・運動的反応と生理的活動を伴う点が、主として主観的な意識状態を指すとされている感情とは異なる。ただし、それぞれの項目において、主観的側面、行動的側面、生理的側面についての言及はあり、2つの概念間での明確な区別と整理は見送られたようである。

ここで取り上げた感情と情動の項目は、日本の感情研究のパイオニアであり日本を代表する心理学者たちによって執筆されたものであるが、この事典の原稿が準備されたと考えられる1970年代末から1980年代の初めにかけての感情研究者の悩みや苦勞を推測することができる。実際、感情の項目には、「・・・以上あげてきた諸定義は、しかしながら、きわめて便宜的なものと言わざるを得ない。・・・(p.124)」と記されている。

2. 英語概念への言及

このような混乱の原因は、主として感情という現象そのもののあいまいさや複雑さによると言えるが、同時に、外国語との対応付けの困難さもそ

の一因として指摘することができる。この問題は国際的には英語が心理学の主要言語になっていることもあり、現在では主に英語と日本語との翻訳の問題と限定することができるが、そうであっても研究者によって用いる訳語が異なることも少なくない。例えば、濱 (2001) は、感情関係概念を次のように説明している。

(前略)・・・感情 (feeling) とは、広義には経験の情動的 (affective) あるいは情緒的 (emotional) な面を表す総称的用語である。・・・中略・・・情緒 (情動) は、急激に生じ短時間で終わる比較的強い感情をいう。たとえば、怒り、恐れ、愛などである。・・・(中略)・・・感情に関する現象を記述する用語として、情緒 (情動) (emotion)、感情 (feeling、affection)、気分 (mood)、人格特性 (personality trait) がある。これらの用語の使用は時間を基礎に考えることができる。

「情緒 (情動)」は、ある刺激や要求の変化によって一過性の急激な表出や自立反応系の変化を伴って生じる現象で、秒ないしは分の単位での現象である。「感情」という用語は、広義には「情動 (情緒)」、「気分」、「情操」を含む包括的な用語であるが、狭義には、「快-不快」を両極とし、さまざまな中間層をもつ状態と定義される。・・・(後略) (濱, 2001)。

ここでは、先の「心理学事典」と同様に、感情の訳語として feeling が用いられ、emotion は情緒、または情動と対応付けられている。一方、遠藤 (1996) は、emotion には濱と同様に情動を当てているが、感情には affect を対応させている。以下の引用に示されているように、遠藤は、英語における emotion という概念を限定的にとらえており、affect が上位の概念であると明示している。

(前略)・・・筆者は「情動」という術語を英語圏における emotion の訳語として用いている。しかし、英語圏には、この emotion に関連する語として、affect というとても厄介な言葉が存在している。Affect は一般に、上述した情動はもちろん、人を何らかの行為に駆り立てる各種の欲求・欲動 (渇きや空腹、求温や求冷欲、睡眠欲、疲労・休息欲、性欲など) を内包した広義の概念である。・・・(中

略)・・・

筆者は、「感情」という術語が日本においては、最も広義にまた一般的に用いられ、そして時に英語圏における emotion という術語が指し示す以上のものを意味するということから、感情を affect の訳語として用いたいと考える。・・・(後略) (遠藤, 1996)。

このように英語の一連の概念と対応付けることは、問題となっている概念群を整理するための一つの方法であると思われる。しかし、その対応付けが一貫していないことにより、新たな混乱が生じる可能性もあるといえるだろう。以下に引用した一般的な辞書の定義を見ると (Merriam-Webster Dictionary インターネット版, 2011、6、20)、affect と emotion はそれぞれ、feeling と関係しており、consciousness や subjective aspect 等の説明があることから、主観的感情経験が意味の中心にあるように思われる。しかし、同時にそれぞれに外的反応が伴うことも指摘されており、辞書の説明を見るだけでは単純に概念間の上下関係を決定することは容易ではない。関連して、affect と emotion の説明文で引用されている他の概念を見ても、相互に言及されているなど、英語の一般的な概念としても、感情概念は曖昧で不明確であると言ってよい。感情概念に関しては、英語に言及することによって日本語の概念が整理されることは期待できないと思われる。

Affect

1 obsolete : feeling, affection

2: the conscious subjective aspect of an emotion considered apart from bodily changes; *also* : a set of observable manifestations of a subjectively experienced emotion

Emotion

1a obsolete : disturbance *b* : excitement

2a : the affective aspect of consciousness : feeling *b* : a state of feeling *c* : a conscious mental reaction (as anger or fear) subjectively experienced as strong feeling usually directed toward a specific object and typically accompanied by physiological and behavioral changes in the body

Affection

- 1: a moderate feeling or emotion
 2: tender attachment : fondness
 3a (1) : a bodily condition (2) : disease, malady b : attribute
 4*obsolete* : partiality, prejudice
 5: the feeling aspect (as in pleasure) of consciousness
 6a : propensity, disposition b archaic : affectation l
 7: the action of affecting : the state of being affected

Feeling

- 1a (1) : the one of the basic physical senses of which the skin contains the chief end organs and of which the sensations of touch and temperature are characteristic : touch (2) : a sensation experienced through this sense b : generalized bodily consciousness or sensation c : appreciative or responsive awareness or recognition
 2a : an emotional state or reaction b plural : susceptibility to impression : sensitivity
 3a : the undifferentiated background of one's awareness considered apart from any identifiable sensation, perception, or thought b : the overall quality of one's awareness c : conscious recognition : sense
 4a : often unreasoned opinion or belief : sentiment b : presentiment
 5: capacity to respond emotionally especially with the higher emotions
 6: the character ascribed to something : atmosphere
 7a : the quality of a work of art that conveys the emotion of the artist b : sympathetic aesthetic response
 8: feel 4

Passion

- 1*often capitalized* a : the sufferings of Christ between the night of the Last Supper and his death b : an oratorio based on a gospel narrative of the Passion
 2*obsolete* : suffering

- 3: the state or capacity of being acted on by external agents or forces
 4a (1) : emotion (2) *plural* : the emotions as distinguished from reason b : intense, driving, or overmastering feeling or conviction c : an outbreak of anger
 5a : ardent affection : love b : a strong liking or desire for or devotion to some activity, object, or concept c : sexual desire d : an object of desire or deep interest
 (Merriam-Webster Dictionary より部分的に引用)

3. 暫定的なまとめと課題

ここまで感情と情動の定義について、いくつかの代表的な記述を取り出して検討してきたが、感情概念の定義が容易ではないことがあらためて把握できたように思う。ただし、結論を出すには資料があまりにも限定的であるため、ここでは暫定的にまとめるということにしておきたい。

取り上げた定義を吟味すると、感情という現象はあいまいで複雑であるため明確な定義をすることは容易ではないという認識があり、執筆者自らが指摘しているように、事典における定義そのものが暫定的である。ただし、比較的共有されると思われることは、感情が相対的に広い概念として用いられているのに対して、情動は感情に属する概念として、特に強い強度と短い時間によって特徴づけられている点である。また、英語との関係は必ずしも単純ではないため、翻訳の問題として一般的に言われるように、感情概念についても異言語間の対応付けには注意を必要とする。

II 英語圏における感情の検討 : Izard (2010) による検討

感情研究の第一人者の一人である Izard (2010) は「感情の多様な意味と側面 : 定義、機能、喚起、調整 (The many meanings/aspects of emotion: Definitions, functions, activation, and regulation)」という論文において、やはり現在においても、感情の定義が定まっていないことを問題にし、その現状を検討するための研究を行っている。Izard は 4 か国、女性 8 名を含む 35 名の優れた感情研究者を対象に (「優れた研究者」は Izard によって

決定されている)、(1)感情の定義、(2)感情の機能、(3)感情を喚起する要因、(4)感情の調整、(5)感情・認知・行為の関係、(6)今後研究すべき研究テーマ、について電子メールを用いた調査を実施し、その結果を報告している。

ここでは紙面の制約もあるので、この調査結果の中から感情の定義と機能に関する部分を取り上げて検討したい。表1に、感情の構造に関する見解を示した項目とそれぞれに同意する程度が10段階で示されている。最も同意の程度が高いのは、専用の神経系が感情のプロセスに関係しているという項目であり、8.92であった。また、反応系、主観的体験についても比較的高い数値であった。

一方、最も同意の程度が低いのは、感情が主観的体験状態の認知的解釈であるという項目であった。主観的体験状態の認知的解釈がこのような低い数値であることは、筆者にとっては意外な結果であったが、この見解を感情の一つの側面についてのものでではなく、このような構造が感情のすべてであるという主張と解釈されれば、同意の程度が低くなる可能性はあると思われる。

Izard はあらかじめ用意した項目への評定だけでなく、感情の定義に関する自由記述による回答も得ている。自由記述による回答の分析にあたっては、その内容を分類し、個々の回答がどの分類に当てはまるかを判断するために、7名の心理学関係者(研究者、ポスドク、大学院生を含む)が判定者となって評価を行っている。具体的には、分類項目数が最も多かった判定者Aの項目に対して、他の判定者がその分類に同意したか否かが示されている(表2参照)。

集計の仕方は必ずしも単純明快ではないが、結果を考察すると、全体としては判定者間の同意が必ずしも高くないことが注目される。Izardによれば、判定者BとCは、それぞれ心理学者ということであったが、同意している分類が全くない。このような意見の不一致は、感情概念が個々の研究場面で全く異なる捉え方をされている可能性を示すものと考えられる。相対的に一致度が高い項目は、生理学的要素を持つこと、主観的体験の要素を持つことであり、続いて、体制下された反応のセット、行動、または表出の要素、認知的要素、動機づけ、適応的機能に関する記述であった。

感情の機能に関する質問への回答は表3にまとめた。Izardが用意した感情の様々な機能を提示した項目に対してどの程度同意するかが示されている。分析の結果、最も同意の程度が高いのは反応系を調達するという機能であり、それに認知と動作の動機づけの機能が続く。一方、同意の程度が低いのは、接近・回避行動の動機づけという機能であり、反応の統制、社会的統制についても高くはない。このように、感情の機能についての考え方にも研究者によってかなり大きな幅があることがうかがわれる。

このような調査結果を受けて、Izard (2010) は、科学的文献においてこれから「感情」という用語をどのように扱うべきかについて、追加の調査を行っている。以下の3項目について、27名の研究者が、どの程度同意するかを10段階で回答している(数値は平均と標準偏差)。結果は必ずしも悲観的に解釈する必要はないと思われるが、抽象的な感情概念を放棄するという意味合いの3の項目についても必ずしも低い数字にはなっていないことは注意すべきである。この点は、裏を返せば、項目2の、感情を脈絡化、もしくは文脈化して意味を限定することの重要性を多くの研究者が指摘していることと関係すると思われる。すなわち、抽象的な議論ではなく、感情の問題に関わる具体的な付帯条件を記述することの重要性を意味していると考えられる。

1. 「感情」はあいまいで科学においては一定の位置を占めていない。: 6.2 (SD = 3.3)
2. 研究者は「感情」を脈絡化し、何を意味するかを明確にするべきである。: 8.2 (SD = 2.6)
3. 限定的でない単数名詞の「感情」は放棄する。: 6.3 (SD = 3.6)

このような英語圏での感情に関する調査結果を見て、現状からいえることは、Izardが指摘しているように、研究者が操作的定義を示し、少なくともその研究で扱う「感情」が何を意味するかを特定することである。今後の感情の科学的研究の進展は、研究者が「感情」や個別の感情を、どの程度脈絡化し、特定する意思を持っているにかかっているとと言えるだろう。

Ⅲ 学術用語としての感情概念：表情研究を例に

概念の抽象的な説明である定義の検討を通じて、30年以上前と同様に、改めて感情概念をどのように捉え、説明するかを検討する必要性が示された。感情概念が現在どのように捉えられているかを検討する方法は、Izard (2010) にも示唆されているように、具体的な研究において感情に関係する概念がどのように使用されているかを調べることである。この節では、心理学における表情研究に焦点を絞り、実証的な研究において感情概念がどのように取り上げられ、使用されているかを検討する。なお、「表情」は身体や人以外の事物に対する印象などを含めて広い意味でとらえることもできるが、ここでは基本的に顔面にお

表1 「感情」の構造に関する項目への同意の程度

構造	同意の程度
「感情」のプロセスには少なくとも部分的に専用の神経系が関与している	8.92
反応系	8.61
主観的体験、また、その状態	7.84
表出行動、信号系	6.56
先行条件の認知的評価	6.54
主観的体験状態の認知的解釈	4.79

注：Izard (2010) Table1より。数値は同意の程度(1全く同意しない～10完全に同意する)の平均値。

表2 「感情」の定義に見出された特徴と判定者間の同意

特長(判定者Aによる)	B	C	D	E	F	G
体制化された反応のセット				✓	✓	
生理学的要素			✓	✓		✓
行動、または表出の要素			✓			✓
主観的体験の要素			✓	✓		✓
認知的要素				✓		✓
評価の要素						
動機づけ機能、または行為の衝動			✓			✓
適応的機能、または対処機能			✓			✓
おそらく無意識的				✓		
脳に関係した						
感情は個々に異なる						

注：Izard (2010) Table3より。チェックは特徴が含まれていることへの同意を示す(判定者Aと他の判定者との一致)。

表3 「感情」の機能に関する項目への同意の程度

構造	同意の程度
反応系の調達	8.87
認知と動作の動機づけ	8.23
反応の体制化、秩序化、調整	7.78
事態の重大性に関する監視、評価	7.77
情報、意味の提供	7.35
関係的機能	6.82
社会的機能	6.38
反応の統制	6.22
主として接近・回避と特徴づけられる行動の動機づけ	4.96

注：Izard (2010) Table2より。数値は同意の程度(1全く同意しない～10完全に同意する)の平均値

ける感情の表出を指すものとする。

1. 事典、総説における表情と感情

(1) 「心理学事典」(1995)

先に感情の定義で引用した「心理学事典」には、表情という項目は、「表出」という大項目の中の下位項目として取り上げられている (p.729)。表情は、感情を表出したり、表情から感情を認知したりするという点で、感情と深くかかわっている。このような表情研究で扱われる感情には主に2つの種類があり、一方はカテゴリカルな感情、他方は次元としての感情である。以下に、カテゴリ研究と次元研究に分けてどのような感情カテゴリと次元の名称が用いられてきたかを示す。

カテゴリカルな感情を重視する立場では、基本感情と呼ばれる少数の感情があり、一つ一つの感情が独立していると考える。これに対して、次元としての感情を重視する立場では、感情のカテゴリは感情空間における布置を示すだけであり、重要なのはその空間を定義する次元であると考えられる。例えば、快-不快、覚醒水準によって定義される2次元空間を想定し、様々なカテゴリはこの空間のある位置を占めていると考える。カテゴリそのものには絶対的な意味はなく、その布置の持つベクトル(快-不快と覚醒水準によって定義される)に意味があるということになる。

これら2つの立場で論争も行われてきたが、ここでは具体的な感情概念との関係を確認しておきたい。表出の項目で取り上げられている研究とそこで用いられている感情を以下に引用した。これらの感情概念を見ると、カテゴリ研究内ではそのいくつかが共通しているが、カテゴリ研究と次元研究の両方で完全に一致するものはない。

なお、引用されている研究はすべて英語で記述されているため、ここで示されている日本語の感情や次元の名称も実際の研究では英語で記述されている。しかし、本稿では日本における感情概念の使用に焦点を当てるため、日本語による記述を取り上げて検討することにする。

カテゴリ研究：

Woodworth (1938) 愛・歓喜・幸福／驚き／恐怖・苦しみ／怒り・決心／不快／軽べつ
Ekman (1972) 幸福、驚き、恐怖、悲しみ、怒り、不快・軽べつ、興味

次元研究：

Schlosberg (1954) 快 - 不快、注意 - 拒否、
休止 - 緊張

(2)「顔と心 - 顔の心理学入門」(1994)

本書は、心理学の分野を中心に顔や表情をテーマにした研究に焦点を絞った日本で初めての専門書である。その第6章「感情の変容と表情」において関連する先行研究をまとめているが、「心理学事典」で示された結果と同様に、カテゴリー研究で取り上げられている感情と次元研究（認知次元）で扱われる感情次元とは基本的に異なっており、完全に同じものは一つもない。それに対して、それぞれの研究グループにおいては研究者によるばらつきはあるものの、共通した感情や次元も一定数見られる。カテゴリー研究においては、嬉しさ、喜び、驚き、恐れ、怒り、嫌悪は取り上げられたほぼすべての研究に共通している。一方、感情の認知次元研究においては、快 - 不快、覚醒、注意が多くの研究に共通している。

カテゴリー研究：

Woodworth (1938) 愛・歓喜・嬉しさ、驚き、
恐れ、怒り・決意、嫌悪・軽べつ

Plutchik (1962) 恥ずかしさ・嬉しさ・喜び、
驚き・驚嘆・驚愕、懸念・恐れ・恐怖、困惑・
怒り・激怒、やっかい・嫌悪・憎悪、親切・
期待・予期、受容・合体

Osgood (1966) 満足・静かな快／喜び・歓喜・
困った笑い、驚き・驚嘆・当惑・畏敬、恐れ・
ホラー、絶望・退屈・おぼろげな悲しみ／
急な悲しみ・絶望、不機嫌な怒り・激怒・
頑固さ・決意、困惑・嫌悪・軽べつ・侮辱・
憎悪、期待・不信・不安

Tomkins & McCarter (1964) 悲しみ・喜び、
驚き・仰天、恐れ・恐怖、苦悩・苦痛、怒り・
激怒、嫌悪・軽べつ、興味・興奮、恥ずかしさ・
侮辱

Frijda (1968) 嬉しさ、驚き、恐れ、悲しみ、
怒り、嫌悪、注意、落ち着き／苦々しさ／
誇り／皮肉／危険／疑い

Ekman ら (1982) 嬉しさ、驚き、恐れ、悲
しみ、怒り、嫌悪・軽べつ、興味

次元研究：

Schlosberg (1954) 快 - 不快、覚醒、注意・

興味・注意活動

Osgood (1966) 快 - 不快、覚醒、注意・興味・
注意活動、制御・感情強度 - 制御

Frijda (1969) 快 - 不快、注意・興味・注意
活動、制御・感情強度 - 制御、社会評価・
自然 - 人工、強度、肯定 - 否定的社会的態
度

Berglundh 他 (1982) 快 - 不快、覚醒、注意・
興味・注意活動

Abelson & Sermat (1962) 快 - 不快、注意・
覚醒

Gladstones (1962) 快 - 不快、注意・覚醒、
説明の困難さ

Russell & Bullock (1985) 快 - 不快、覚醒度

(3)「顔研究の最前線」(2004)

本書は前項の「顔と心」から10年の後に顔研究の最新情報をまとめたものであり、第4章の「顔の表情と認知」ではより新しい研究について紹介している。ここで引用されている研究は、カテゴリー説と次元説を代表するような研究者によるものであり、それぞれの主張がまとめられている。これまで紹介した文献と同様に、両者の研究が扱う感情は独立したものであるが、感情次元によって定義される空間に感情カテゴリーがどのような布置で分布するかが示されている。この感情カテゴリーの布置がどの程度一貫したものであるかについてはさらに検討が必要であるが、カテゴリーと次元という考え方が、必ずしも二律背反の関係にはないことが示されている。

カテゴリー説：

Ekman (1999) 喜び、悲しみ、怒り、恐怖、
嫌悪、驚き

次元説：

Russell & Bullock (1986) 快 - 不快、覚醒度
→ 第1象限：喜び、興奮、満足／第2
象限：眠気、中性、退屈／第3象限：悲し
み、嫌悪／第4象限：怒り、恐怖、驚き

山田 (2000) 湾曲性・開示性、傾斜性（視覚
的情報抽出の段階）

→ 快 - 不快、活動性（感情的意味評価）

2. 心理学の実証的研究論文における表情と感情：
日本における近年の研究

この項では、心理学の実証的研究において、具

体的に表情がどのように感情と関係づけられているかを検討する。対象としたのは、1990年以降に出版された日本の心理学系学術雑誌である、「心理学研究」、「感情心理学研究」、「基礎心理学研究」、「社会心理学研究」、「発達心理学研究」、「教育心理学研究」、「対人社会心理学研究」に掲載された論文で、データベース化されているものである。キーワードとして、「表情」と「感情」の両者を含む論文を検索した結果から、展望論文等の実証研究を伴わないものを除外して検討の対象とした(2011年6月1日現在)。独立変数か従属変数のいずれかに広義の「表情」に関する要因が含まれているものを選んだところ56件の論文があり、個々の研究で用いられた感情、独立変数、従属変数などをリストにして研究テーマごとに付録の表Aに示した。

発表年による頻度の違いはあるが、全体としてはコンスタントに研究が発表されている(最多は1997年の6件で、最低は1993年他の1件である)。研究の主要テーマに基づいて筆者が便宜的に分類したところ、複数の分類にまたがるものも含めて、表情認知に関するものが最も多く26件、次いで感情表出に関するものが6件であった。年代による研究テーマの変化としては、1990年代は感情認知が多くを占め、徐々に多様なテーマに関心が移っている様子を伺うことができる。

独立変数として表情を操作して感情の判断を求める研究もあれば、従属変数として表情の特徴を測定しているものもあるなど、様々な研究が行われているが、表情認知、感情表出に関する研究ではほぼすべての論文で、カテゴリカルな感情が扱われており、基本感情と呼ばれる6種類程度の感情(怒り、嫌悪、喜び、悲しみ、驚き、恐れ)のすべてかその一部を、実験刺激や測定対象と関連付けている。また、これらの研究のうち藤村・鈴木(2006)、小川・藤村・鈴木(2005)、小川・鈴木(1999)では、カテゴリカルな感情と同時に快-不快、覚醒-睡眠のような感情次元を用い、感情カテゴリーを感情空間上の布置とみなして検討している。具体的には、興奮、喜び、平穏、驚き、眠気、恐れ、怒り、悲しみを取り上げて、それぞれを感情カテゴリーとして検討するとともに、感情空間によって定義できることを示そうとしてい

る。

表情認知、なかでも脳画像などの生理的指標を用いた研究は一般に取り扱う感情が少ない傾向にあり、発達研究や電子メールにおける顔文字の効果のような実際的なテーマ、もしくは相対的に大きな文脈で問題を検討しようとしている研究では、より多様な感情や基本感情以外の感情を取り上げる傾向がある。

なお、笑いなどの、表出された表情そのものを対象にする研究では、必ずしも感情に言及していない場合もある(例えば、氷山, 1999)。また、すでに表情と感情との関係が自明のものとして、表情を特定の感情の指標とみなしている研究もある(例えば、富田, 2009)。

3. まとめ：表情研究における感情

この節では表情に関する実証研究においてどのような感情が取り上げられるかについて、総説的な文献と実験論文とを検討してきた。感情概念がどのように使用されているかは、大まかに次のようにまとめられよう。

- 1) 表情認知に関係する研究においては、大きく感情カテゴリーと認知次元を扱う研究に分かれ、日本の最近の研究では相対的に感情カテゴリーを扱うものが多い。
- 2) カテゴリー研究では個々の感情名、特に基本感情と呼ばれる6種類程度の感情を扱うことが多い。
- 3) 認知次元を扱う研究では、空間を定義する要因として快-不快、注意や覚醒を取り上げることが多い。
- 4) 感情をより大きな文脈でとらえようとしている研究では、より多くの感情、もしくは基本感情以外の感情を対象にする傾向がある。

1990年以降の研究の流れを考慮すると、このような基本感情に基づく表情の認知や表出についての研究はEkmanらによる基本感情、基本表情についての一連の研究成果に基づくものであると考えられる(Ekman, 1972)。その後、次第に感情次元との関係を検討したり、その他の要因との関係を検討したりするような流れを反映していると考えられる。さらに、その是非は引き続き問われなければならないが、基本感情と表情との関係

は今や定説となり、表情が特定の感情カテゴリーの指標として測定されるようになったと説明することができよう。ただし、より現実的な感情について扱うためには基本感情やカテゴリーカルな感情だけでは必ずしも十分ではなく、より広い範囲の感情カテゴリーや感情次元が扱われることになる。

現時点でのまとめ：当面の課題

本稿では、心理学分野の研究における感情概念のあいまいさの現状を確認するために、感情の定義に関する検討から始め、英語圏での定義の状況、実証的研究における感情概念の使用状況を確認してきた。現時点でのまとめとしては、研究のテーマや理論的立場によって使用される具体的な感情概念には一定の共通点や傾向もあるといえる。しかし一方で、テーマや立場が異なれば、取り上げられる感情概念も異なり、ほとんど共通点が見出せない場合もある。日本における1990年以降に出版された論文においても、同様の傾向と、さらに研究テーマによってはより広範な感情概念が取り上げられていることが示された。

このような状況において当面どのようにすべきかを考えると、研究を文書化するに当たり、研究の背景や実験状況などをできるだけ詳しく記述することであると思われる。これはIzard (2010)によれば、感情を脈絡化することであり、研究を報告するにあたって、可能な限りの付随条件に関する情報を提供することが求められている。

当面どうすべきかについても一つ提案できることは、メタ分析による不変項の抽出ということであり、変動や差異を明らかにする作業である。これは、特定の研究テーマで用いられる感情概念と、他のテーマで用いられるものと比較し、両者の共通点と相違点をまとめる作業を地道に繰り返すことによって、感情概念検討のための地図を製作することである。なお、この作業に当たっては、個々の研究の報告で、先に述べた脈絡化、文脈化が行われていれば、より効率的に不変項と変動性を特定することにつながると考えられることから、脈絡・文脈化とメタ分析の相補的な作業が求められているといえよう。

現時点では、個々の実証研究で用いられている

感情概念の意味などの詳細な検討には至っていないため、今後の課題としたいが、概念そのものより深い検討、すなわち感情とは何かという問いは実際には幾重にも重なる問いの連続の出発点である。喜びが感情であるとする、喜びとは何か。笑顔が喜びの表情だとすると笑顔とは何か、さらにこれらの概念を構成する下位構造や要素は何であるかという際限のない問いにつながっていくことになる。どのレベルの分析が適切かについては、おそらく研究のテーマや学問分野によって変わるものと思われるが、このようなレベルの問題も含めてわれわれは脈絡化していく必要があり、まさに学際的な感情の現象に分け入っていくために必要な取り組みとして検討を続けていかななくてはならない。

¹ 本研究の一部は、平成23年度国立国語研究所共同研究プロジェクト「パラ言語情報および非言語情報の研究における基本概念の体系化」(代表者：森大毅)の支援を受けて行われた。

参考文献

- 荒川歩・河野直子(2008)「顔文字の表示形態および中途での改行がメールの印象評定および受信者の感情に与える影響」『感情心理学研究』15巻2号、107-114頁。
- 荒川歩・鈴木直人(2004)「しぐさと感情の関係の探索的研究」『感情心理学研究』10巻2号、56-64頁。
- 荒川歩・竹原卓真・鈴木直人(2006)「受信者が感じている感情が送信者の顔文字使用に与える影響」『感情心理学研究』13巻2号、49-55頁。
- 荒川歩・竹原卓真・鈴木直人(2006)「顔文字付きメールが受信者の感情緩和に及ぼす影響」『感情心理学研究』13巻1号、22-29頁。
- 綾部早穂・小早川達・齋藤幸子(2003)「2歳児のニオイの選好－バラの香りとスカトールのニオイのどちらが好き?－」『感情心理学研究』10巻1号、25-33頁。
- 遠藤利彦(1996)『喜怒哀楽の起源』岩波科学ライブラリー41 岩波書店

- 福原省三 (1990) 「アイ・コンタクトと印象の評価が受け手の対人感情に及ぼす効果」『心理学研究』61 巻 3 号、177-183 頁。
- 藤村友美・鈴木直人 (2006) 「動画表情と静止画表情の認知構造」『感情心理学研究』13 巻 2 号、56-64 頁。
- 藤田和生 (編) (2007) 『感情科学』 京都大学出版会
- 古屋喜美代・高野久美子・伊藤良子・市川奈緒子 (2000) 「絵本読み場面における 1 歳児の情動の表出と理解」『発達心理学研究』11 巻 1 号、23-33 頁。
- 郷田賢・宮本正一 (2000) 「感情判断における顔の部位の効果」『心理学研究』71 巻 3 号、211-218 頁。
- 濱治世 (1993) 「三世同居家族における祖母－母親－子どもの感情的相互作用に関する実験的研究」『感情心理学研究』1 巻 1 号、26-47 頁。
- 濱治世 (2001) 「感情・情緒 (情動) とは何か」濱治世・鈴木直人・濱保久 (共著) 『感情心理学への招待 感情・情緒へのアプローチ』サイエンス社 pp.1-62。
- 橋本由里、宇津木成介 (2006) 「顔線画の表情と視覚的注意の定位－口の形状が視線による手掛かり一致効果に及ぼす影響－」『感情心理学研究』13 巻 1 号、13-21 頁。
- 日比野桂・湯川進太郎・小玉正博・吉田富士雄 (2005) 「中学生における怒り表出行動とその抑制要因－自己愛と規範の観点から－」『心理学研究』76 巻 5 号、417-425 頁。
- 永山ルツ子 (1999) 「表情と人物の同一性が顔の認知に及ぼす効果－プライミング課題による検討－」『心理学研究』70 巻 3 号、186-194 頁。
- 永山ルツ子・吉田弘司・利島保 (1995) 「顔の表情と既知性の相互関連性－顔画像の空間周波数特性の操作と倒立呈示法を用いた分析－」『心理学研究』66 巻 5 号、327-335 頁。
- 本間元康・長田佳久 (2007) 「顔の時系列変化が表情認知に及ぼす効果－モーフィング動画像と実動画像－」『基礎心理学研究』26 巻 1 号、55-60 頁。
- 市川奈緒・野村理朗・飯高哲也・大平英樹 (2007) 「表情フィードバックの情動価が課題パフォーマンスに与える影響」『感情心理学研究』14 巻 1 号、27-38 頁。
- 飯塚雄一 (1995) 「視線とシャイネスとの関連性について」『心理学研究』66 巻 4 号、277-282 頁。
- 稲嶺麻希子・遠藤光男 (2009) 「感情の表情表出における状況と性別の効果－日本人大学生での検討－」『感情心理学研究』17 巻 2 号、134-142 頁。
- 井上弥 (2000) 「感情表出抑制に及ぼす人・場所状況と他者意識の効果」『感情心理学研究』7 巻 1 号、25-31 頁。
- 井上弥・藤原武弘・石井眞治 (1990) 「顔面表情と音声による感情の表出・認知における個人差」『心理学研究』61 巻 1 号、47-50 頁。
- 伊藤順子 (1997) 「幼児の向社会的行動における他者の感情解釈の役割」『発達心理学研究』8 巻 2 号、111-120 頁。
- 菊池哲平 2004 「幼児における自分自身の表情に対する理解の発達の变化」『発達心理学研究』15 巻 2 号、207-216 頁。
- 木野和代 (2004) 「対人場面における怒りの表出方法の適切性・効果性認知とその実行との関係」『感情心理学研究』10 巻 2 号、43-55 頁。
- 北山忍・内田由紀子・新谷優 (2007) 「文化と感情 現代日本に注目して」藤田和生 (編) 『感情科学』 京都大学出版会 pp.173-209。
- 小嶋桂子 (2001) 「他者の嫌悪に対処する方略についての幼児の知識」『感情心理学研究』8 巻 1 号、14-23 頁。
- 小森政嗣・福井正昇・長岡千賀 (2011) 「対面場面における表情の同調的表出に関する形態測定学的検討」『対人社会心理学研究』11 巻、73-79 頁。
- 松尾浩一郎 (1997) 「幼児期における感情を表現した比喩の理解」『発達心理学研究』8 巻 3 号、165-175 頁。
- 三浦正樹 (1993) 「顔面表情の知覚における個人差－性差及び認知様式との関係」『心理学研究』63 巻 6 号、409-413 頁。

- 溝川藍 (2007) 「幼児期における他者の偽りの悲しみ表出の理解」『発達心理学研究』18 巻 3 号、174-184 頁。
- 門地里絵・鈴木直人 (2000) 「イメージされた“緊張からの開放状況”と“安らぎ状況”において喚起された安堵感に付随する生理的反応」『感情心理学研究』6 巻 2 号、70-82 頁。
- 中丸茂 (1997) 「勝負事態における勝敗決定時の表情筋電図の時系列的变化」『感情心理学研究』5 巻 1 号、1-9 頁。
- 中野良樹・伊藤由美 (2009) 「感動詞「エー」を表出した表情と音声に対するマルチモーダルな感情認知」『感情心理学研究』16 巻 3 号、195-208 頁。
- 中村真 (2011) 「心理学における感情概念の検討：表情研究を中心に」国立国語研究所共同研究プロジェクト研究会『パラ言語情報および非言語情報の研究における基本概念の体系化』における発表 (2011 年 6 月 10 日)
- 中村真・益谷真 (2001) 「高齢者の感情表出－演技された表情の実証的検討－」『感情心理学研究』7 巻 2 号、74-90 頁。
- 長屋佐和子 (2005) 「乳幼児表情写真 (IFEEL Pictures) を用いた母親の情緒応答性の測定：子どもの性差・人数・年齢が与える影響」『発達心理学研究』16 巻 2 号、156-164 頁。
- 野口素子・吉川左紀子 (2009) 「表情表出の抑制・誇張が主観的情動経験に及ぼす影響」『感情心理学研究』17 巻 1 号、12-18 頁。
- 野村理朗・大平英樹・羽田薫子 (2002) 「閩下感情プライミングにおける脳の神経的応答－Event related fMRI を用いた検討－」『感情心理学研究』9 巻 2 号、87-97 頁。
- 野村理朗・大平英樹・松本敦・笈一彦 (2002) 「曖昧表情の認知過程における事象関連電位 (ERP) の応答」『感情心理学研究』9 巻 2 号、77-86 頁。
- 野村理朗・竹原卓真 (2004) 『顔研究の最前線』北大路書房
- 織田朝美・向田茂・加藤隆 (2008) 「瞬間的表情変化の知覚における顔の部位の効果」『感情心理学研究』16 巻 2 号、119-132 頁。
- 小川時洋・鈴木直人 (1999) 「線画表情を用いた特徴点変位と表情認識の関係」『感情心理学研究』6 巻 1 号、17-26 頁。
- 小川時洋・鈴木直人 (1998) 「閩下感情的プライミング効果の検討」『感情心理学研究』5 巻 2 号、70-77 頁。
- 小川時洋・藤村友美・鈴木直人 (2005) 「瞬間呈示事態における表情知覚」『感情心理学研究』12 巻 1 号、1-11 頁。
- 大平英樹 (編) (2010) 『感情心理学・入門』有斐閣アルマ
- 大藪博記・森本裕子・中島智史・小宮あすか・渡部幹・吉川左紀子 (2010) 「表情と言語的情報が他者の信頼性判断に及ぼす影響」『社会心理学研究』26 巻 1 号、65-72 頁。
- 櫻庭京子・今泉敏 (2001) 「2～4 歳児における情動語の理解力と表情認知能力の発達の比較」『発達心理学研究』12 巻 1 号、36-45 頁。
- 佐々木康成 (2005) 「感情に基づく歩行動作の識別について－演技者を用いた研究－」『感情心理学研究』12 巻 2 号、56-61 頁。
- 笹屋里絵 (1997) 「表情および状況手掛かりからの他者感情推測」『教育心理学研究』45 巻、312-319 頁。
- 品川瑞穂、山岸俊男、谷田林士、高橋知里、犬飼佳吾、小泉径子、横田晋大、三船恒裕、高岸治人、堀田結孝、橋本博文 (2010) 「他者の協力行動の推測の正確さを規定する要因－魅力度と表情豊かさ－」『心理学研究』81 巻 2 号、149-157 頁。
- 白石舞衣子・宮谷真人・峯由希美 (2007) 「異なる人物の表情同一性に基づくプライミング効果」『感情心理学研究』14 巻 1 号、15-26 頁。
- 田村綾菜 (2009) 「児童の謝罪認知に及ぼす加害者の言葉と表情の影響」『教育心理学研究』57 巻、13-23 頁。
- 田村亮・亀田達也 (2006) 「表情は模倣されるのか－日本人参加者を用いた検討－」『心理学研究』77 巻 4 号、377-382 頁。
- 富田昌平 (2009) 「乳児期における不思議を楽しむ心の発達：手品に対する反応の分析から」『発達心理学研究』20 巻 1 号、86-95 頁。
- 塚本伸一 (1997) 「子どもの自己感情とその自己統制の認知に関する発達の研究」『心理学研

究』68巻2号、111-119頁。
 宇良千秋・矢富直美 (1997) 「高齢者の笑いの表情に対する年齢と認知能力の影響」『発達心理学研究』8巻1号、34-41頁。
 山口真美 (1992) 「表情の筋電図による分析-演技経験者と非演技経験者での違い-」『社会心理学研究』7巻3号、180-188頁。
 山本恭子・鈴木直人 (2008) 「対人関係の形成過程における表情表出」『心理学研究』78巻6号、567-574頁。
 山本恭子・鈴木直人 (2007) 「他者との関係性が刺激呈示中および提示後期間の表情表出に及ぼす影響」『社会心理学研究』23巻1号、1-9頁。
 山本哲也・杉森伸吉・嶋田洋徳 (2010) 「自己注目時のネガティブな認知的処理に及ぼす笑顔の効果」『心理学研究』81巻1号、17-25頁。

吉川左紀子・益谷真・中村真 (1994) 『顔と心-顔の心理学入門』サイエンス社
 Ekman, P. (1972) Universals and cultural differences in facial expressions of emotion. In J. Cole (Ed.), *Nebraska Symposium on Motivation, 1971*, 19, Lincoln, NE: University of Nebraska Press. pp.207-283.
 Ekman, P. (1999) Basic emotions. In T. Dalgleish and M. Power (Eds.), *Handbook of Cognition and Emotion*. Sussex, U.K.: Wiley & Sons, pp.45-60.
 Izard, C. E. (2010) The many meanings/ aspects of emotion: Definitions, functions, activation, and regulation. *Emotion Review*, Vol. 2, No. 4, 363-370.
 Merriam-Webster Dictionary (<http://www.merriam-webster.com/>) 2011年6月20日に検索

付録 表 A 日本の心理学関係学会誌に掲載された「表情」と「感情」をテーマにした論文 (1990年以降に出版されたもの)

分類	著者	発表年	雑誌	感情	独立変数・提示刺激	従属変数・測定	備考
感情認知	田村綾菜	2009	教育心理学研究	怒り, 罪悪感	怒り喚起場面 (表情罪悪感の有無, 謝罪の有無)	罪悪感の認知 (悪いと思っている)	発達
感情認知	中野良樹・伊藤由美	2009	感情心理学研究	喜び, 驚き, 悲しみ, 嫌悪	表情, 音声とその向者	強制選択 (喜び, 驚き, 悲しみ, 嫌悪)	
感情認知	織田朝美, 他	2008	感情心理学研究	喜び, 怒り, 悲しみ	表情画像	喜び, 怒り, 悲しみ, 無表情	
感情認知	野田賢・宮本正	2000	心理学研究	怒り, 恐れ, 驚き, 嫌悪, 悲しみ, 幸福, 中性	表情の部位 (6種類の感情と中性をあらわす表情の部位を合成した写真)	感情判断 (怒り, 恐れ, 驚き, 嫌悪, 悲しみ, 幸福, 中性から強制選択)	
感情認知	伊藤順子	1997	発達心理学研究	悲しみ	表情 (悲しみ, 微笑み)	感情推測カード (嬉しい, 悲しい, 怖い, 怒っている), 他	発達
感情認知	笹屋里絵	1997	教育心理学研究	喜び, 悲しみ, 怒り	表情 (喜び, 悲しみ, 怒り), 状況 (喜び, 悲しみ, 怒り)	感情理解度, 回答型 (手かかり重視傾向)	発達
感情認知	塚本伸	1997	心理学研究	怒り, 悲しみ, 嬉しさ	感情喚起場面の例話 (ケガ, プレゼント), 他	表情判断 (喜び, 怒り, 苦痛 (泣き), 困惑, 無表情), 自己統制	
感情認知	松尾浩一郎	1997	発達心理学研究	喜び, 悲しみ, 怒り	比喩文 (喜び, 悲しみ, 怒り)	表情 (喜び, 悲しみ, 怒り)	
感情認知	山口真美	1992	社会心理学研究	不快, 快 (スライドへの反応)	ごまかし	見ているスライドの種類	
感情認知	井上崇, 他	1990	心理学研究	喜び, 驚き, 恐れ, 悲しみ, 怒り, 嫌悪	表情と音声 (喜び, 驚き, 恐れ, 悲しみ, 怒り, 嫌悪)	表情と音声の認知 (喜び, 驚き, 恐れ, 悲しみ, 怒り, 嫌悪), YG性格検査, カリフォルニア心理検査簡略版 CPI10	
感情認知 (理解)	長尾先和子	2005	発達心理学研究	喜び, 恥, 疲れ, 思考, 怒り, 悲哀, 眠い, 不安, 不満, 自己主張, 恐怖, 注意, 疑問, 驚き, 対象希求, 苦痛, 欲求, 嫉妬, 我慢	日本語 IFEEL Pictures : 表情写真 30枚	喜び, 恥, 疲れ, 思考, 怒り, 悲哀, 眠い, 不安, 不満, 自己主張, 恐怖, 注意, 疑問, 驚き, 対象希求, 苦痛, 欲求, 嫉妬, 我慢	発達
感情認知 (表情認知)	櫻庭京子・今泉敏	2001	発達心理学研究	喜び, 悲しみ, 怒り, 驚き	感情語・写真 (喜び, 悲しみ, 怒り, 驚き)	表情図選択 (喜び, 悲しみ, 怒り, 驚き)	発達
感情認知 (表情認知 (偽の))	清川藍	2007	発達心理学研究	喜び, 悲しみ, 普通	感情を偽る状況 (偽りの喜び, 偽りの悲しみ)	表情図 (喜び, 悲しみ, 普通)	発達
感情認知 (表情分析)	中村真・益谷真	2001	感情心理学研究	幸福, 驚き, 怒り, 嫌悪, 恐れ, 悲しみ, 軽べつ, 中性	表情の演技 (幸福, 驚き, 怒り, 嫌悪, 恐れ, 悲しみ, 軽べつ, 中性)	幸福, 驚き, 怒り, 嫌悪, 恐れ, 悲しみ, 軽べつ	
感情認知 (模倣, 伝染)	吉屋喜美代, 他	2000	発達心理学研究	泣き, 喜び, 怒り	絵本に描かれた表情 (泣き, 喜び, 怒り)	幼児の表情変化, 模倣, 言語 (泣き, 喜び, 怒り)	
表情認知	白石舞衣子, 他	2007	感情心理学研究	真顔, 笑顔	真顔, 笑顔	表情判断 (真顔, 笑顔), 位置判断	
表情認知	本間元康・長田佳久	2007	基礎心理学研究	悲しみ, 笑顔	表情刺激 (悲しみ, 笑顔)	表情判断 (悲しみ, 笑顔)	
表情認知	藤村友美・鈴木直人	2006	感情心理学研究	興奮, 喜び, 平穏, 驚き, 眠気, 恐れ, 怒り, 悲しみ	表情 (恐れ, 驚き, 興奮, 怒り, 中性, 喜び, 悲しみ, 眠気, 平穏)	いきいきした, うれしい, のんびりした, 驚いた, 眠い, 恐ろしい, 怒った, むかつく, 悲しい, だるい, 普通, アフェクトグリッド (快・不快, 活性・不活性)	
表情認知	小川時洋, 他	2005	感情心理学研究	恐れ, 驚き, 興奮, 怒り, 中性, 喜び, 悲しみ, 眠気, 平穏	表情 (恐れ, 驚き, 興奮, 怒り, 中性, 喜び, 悲しみ, 眠気, 平穏)	いきいきした, うれしい, のんびりした, 驚いた, 眠い, 恐ろしい, 怒った, むかつく, 悲しい, だるい	
表情認知	菊池哲平	2004	発達心理学研究	うれしい, 悲しい, 怒っている, ニュートラル	線画, イラスト, 他者写真, 本人写真表情 (嬉しい, 悲しい, 怒っている, ニュートラル)	ラベルに対応した表情の選択 (嬉しい, 悲しい, 怒っている, ニュートラル)	発達
表情認知	野村理朗, 他	2002	感情心理学研究	怒り	怒り表情 (強・弱)	感情カテゴリー判断 (怒り, 中性, 幸福), fMRI による脳活動の測定	fMRI

表情認知	野村理剛, 他	2002	感情心理学研究	喜び, 悲しみ	表情(強・弱)	脳波 (Fz, Cz, Pz, F3, F4, F7, F8, T5, T6)	(fMRI)
表情認知	永山ルツ子	1999	心理学研究	笑顔, 真顔	表情写真(笑顔, 真顔), 既知性	表情判断(笑顔, 真顔), 既知性	
表情認知	小川時洋・鈴木直人	1998	感情心理学研究	笑顔, 真顔, 怒り顔	プライム刺激としての表情(笑顔, 真顔, 怒り顔)	ターゲット刺激の評価(音恵)	
表情認知	永山ルツ子, 他	1995	心理学研究	笑顔, 真顔	空間周波数, 表情(笑顔, 真顔), 既知性	表情判断(笑顔, 真顔)	
表情認知	三浦正樹	1993	心理学研究	恐怖, 嫌悪, 怒り, 悲しみ, 驚き, 喜び	性差, 認知様式 (CMQ-Ricognitive mode questionnaire-revised)	情動判断(恐怖, 嫌悪, 怒り, 悲しみ, 驚き, 喜び), 強度判断	
表情分析	小森政嗣, 他	2011	対人社会心理学研究	(同調的表現)	しりとり場面での会話	同調的表現(顔面に添付した22の標識点の動き)	
表情分析	中丸茂	1997	感情心理学研究	勝負事の勝敗	勝負事の勝敗事象	EMG(前頭筋, 顔面筋, 大頰筋)	
感情表現	橋岡麻希子・遠藤光男	2009	感情心理学研究	幸福, 悲しみ, 怒り, 恐怖, 驚き, 嫌悪	状況	表現の程度(幸福, 悲しみ, 怒り, 恐怖, 驚き, 嫌悪)	質問紙調査
感情表現	山本恭子・鈴木直人	2008	心理学研究	笑顔, 視線	笑い喚起映像の視聴, ベア	笑い, 視線	
感情表現	山本恭子・鈴木直人	2007	社会心理学研究	笑顔, 眉しかめ	関係性, 刺激映像(快・不快)	表情(笑顔, 眉しかめ, 視線), ポジティブな感情, 親和欲求, 関係性	
感情表現	井上弥	2000	感情心理学研究	怒り, 嫌悪, 恐れ, 喜び, 悲しみ, 驚き	状況, 他者の有無	表情抑制の程度, 快表情を作る程度	質問紙調査
感情表現	宇真千秋・矢野直美	1997	発達心理学研究	笑い	笑い誘発刺激(テレビ番組の映像)	笑い表情(頻度, 持続時間, 強度)	
感情表現	山口真美	1992	社会心理学研究	喜び, 悲しみ, 怒り	演劇経験の有無, 表情調整の有無	EMG(口角挙上筋, 大頰筋, 口角下制筋, 前頭筋, 眼輪筋, 眼瞼筋)	
指標(安堵感, やすらぎ)	門地里絵・鈴木直人	2000	感情心理学研究	安堵感, やすらぎ	イメージ課題(安堵感, やすらぎ, 日常)	生理的指標(心拍数, 呼吸率, 眼瞼筋, 大頰筋筋電図), 主観的評定(安堵感)	
指標(楽しさ)	綾部早穂, 他	2003	感情心理学研究	楽しさ	ニオイの種類	選択行動, 表情(楽しそうに見える)	発達
指標(喜び)	富田昌平	2009	発達心理学研究	小さい喜び, 大きい喜び	手品	表情(変化なし, 小さい喜び, 大きい喜び)	発達
他の要因への効果	大衛博記, 他	2010	社会心理学研究	真顔, 笑顔	表情(真顔, 笑顔), 言語情報(信頼性), 性別	信頼性判断(分配金)	
他の要因への効果	高川環穂, 他	2010	心理学研究	喜び, 悲しみ, 怒り, 嫌悪, 驚き, 恐れ, 軽べつ	演技された表情, 無表情	表情の豊かさ	協力行動の認知
他の要因への効果	山本哲也, 他	2010	心理学研究	笑顔, 口をすぼめる	自分の表情(笑顔, 口すぼめ), 他	状態不安, ポジティブ感情(陽気, さわやか, 幸せ, はつらつとした, 機嫌がよい, 朗らかな, 快活な, 明るい, 気力に満ちた, 快適な), ネガティブ感情(落ち込んだ, 動揺している, 劣等感を感じている, みじめだ, 自信を失った, くよくよした, 悲観的な, 情けない, 泣きたい, 暗い)	笑顔の臨床的効果
他の要因への効果	市川奈緒, 他	2007	感情心理学研究	怒り, 幸福, 中性	表情(怒り, 幸福, 中性)	表情を正誤フィードバックとした時の学習	
他の要因への効果	橋本由里・宇津木成介	2006	感情心理学研究	中性, 驚愕, 不快, 快	縦向き表情(中性, 驚愕, 不快, 快), 視線	位置弁別反応時間	線画刺激としての表情
その他(表情産出)	小川時洋・鈴木直人	1999	感情心理学研究	喜び, 悲しみ, 怒り, 嫌悪, 恐れ, 驚き, 快・不快, 覚醒・睡眠	感情の種類の指示	顔内形による表情の産出	顔内形
その他(表情模倣)	田村亮・亀田達也	2006	心理学研究	怒り, 嫌悪, 喜び, 悲しみ	表情模倣	EMG(上唇鼻翼挙筋, 大頰筋, 眼輪筋, 眼瞼筋), 情動伝染	
その他(顔文字)	荒川歩・河野直子	2008	感情心理学研究	泣き顔, 笑顔, 謝罪	泣き顔, 笑顔, 謝罪	ていねいなーらんぼうな, 明るいー暗い, 親しみのあるーよそよそしい, あたたいーつめたい, 楽しいーつまらない, わかりやすいーわかりにくい, 良いー悪い	質問紙調査
その他(顔文字)	荒川歩, 他	2006	感情心理学研究	悲しみ, 怒り, 不安, 喜び	顔文字(悲しみ, 怒り, 不安, 喜び)	感情(悲しみ, 怒り, 不安, 喜び), 好ましさ, 親しみやすさ, 礼儀正しさ, 誠実さ	質問紙調査
その他(顔文字)	荒川歩, 他	2006	感情心理学研究	悲しみ, 怒り, 不安, 喜び	受信者の感情(悲しみ, 怒り, 不安, 喜び)	対応するためのメールに添える顔文字(涙, 笑顔, 笑顔+汗, 謝罪, めまい, クシャ, クシャ+汗, クール, クール+汗)	質問紙調査
その他(感情抑制)	小嶋桂子	2001	感情心理学研究	嫌悪	相手の嫌悪喚起場面(意地悪をする)	対応法略(向社会的: 一緒にやる, あやまる, 反社会的: あっちへ行つて, 壊す, 非社会的: 気にしないで, 一人で続ける)	
その他(情動制御)	野口素子・吉川左紀子	2009	感情心理学研究	悲しみ, 怒り, 嫌悪, 楽しさ, ポジティブ情動, ネガティブ情動	情動喚起映像(ネガティブ情動(悲しみ, 怒り, 嫌悪), ポジティブ情動(楽しさ))	表現の程度, 情動経験(怒り, 驚き, 悲しみ, 恐怖, 嫌悪, 楽しさ, 満足)	
その他(表出制御)	日比野桂, 他	2005	心理学研究	怒り	抑制要因, 他	怒りの表出(むかついた, ムツとした, いらいらした), 抑うつ(落ち込んだ, 不安になった, 悲しい)	質問紙調査
その他(表出制御)	木野和代	2004	感情心理学研究	怒り	怒り喚起場面における表出方法(感情的攻撃, 曖昧, 表情・口調, 無視, 遠まわし, 理性的説明, いつも通り)	効果性, 適切性の認知	質問紙調査
その他(母子相互作用)	浜治世	1993	感情心理学研究	喜び, 期待, 怒り, 嫌悪, 悲しみ, 驚き, 恐れ, 寛容	感情的映画, 子どもの映像	感情経験(喜び, 期待, 怒り, 嫌悪, 悲しみ, 驚き, 恐れ, 寛容), 生理的指標(心拍数, 血圧, 皮膚温度)	臨床, 三世代同居家族
行動(アイコンタクト)	福原省三	1990	心理学研究	対人感情(外向的・内向的, 理性的・感情的, 現実主義的・理想主義的), 好悪度	視線	視線, EC, 対人感情(外向的・内向的, 理性的・感情的, 現実主義的・理想主義的), 好悪度, 魅力, 誠実さ, 温かさ, 共同作業者としての望ましさ, 接し方のうまさ	
行動(しぐさ)	荒川歩・鈴木直人	2004	感情心理学研究	混乱した・明快な, 受容した・拒否した, 開放的な・閉鎖的な, 不安な・安心な, 興奮した・静い, 恥ずかしい・誇りに満ちた, 集中した・散漫な, 快い・不快な, 緊張した・リラックスした, 苛立った・落ち着いた, 用心深い・軽率な, 暗い・明るい, 攻撃・防衛, 友情・嫌悪, 支配・服従, 喚起の程度	感情テーマ(うれしかったこと, 恐ろしかったこと, だるいこと, かつらひだこと, 不満なこと, 興奮した・静い, 恥ずかしい・誇りに満ちた, 集中した・散漫な, 快い・不快な, 緊張した・リラックスした, 苛立った・落ち着いた, 用心深い・軽率な, 暗い・明るい, 攻撃・防衛, 友情・嫌悪, 支配・服従, 喚起の程度)	しぐさと感情状態(混乱した・明快な, 受容した・拒否した, 開放的な・閉鎖的な, 不安な・安心な, 興奮した・静い, 恥ずかしい・誇りに満ちた, 集中した・散漫な, 快い・不快な, 緊張した・リラックスした, 苛立った・落ち着いた, 用心深い・軽率な, 暗い・明るい, 攻撃・防衛, 友情・嫌悪, 支配・服従, 喚起の程度)	
行動(視線)	飯塚雄一	1995	心理学研究	シャイネス	シャイネス, 面接者の直視量, 性別	直視量, 発話量	
行動(歩行)	佐々木康成	2005	感情心理学研究	焦り, 喜び, 怒り, 悲しみ, 不安, 普通	歩行の演技(焦り, 喜び, 怒り, 悲しみ, 不安, 普通)	歩行観察用評定項目(全身から力が抜けている, 肩の力が抜けている, 上半身の力, 上肢の力, 下肢の力, 足の着地は足の裏全体で, 足の裏が地面を引きずっている, ・・・他21項目)	

心理学研究, 基礎心理学研究, 感情心理学研究, 社会心理学研究, 発達心理学研究, 教育心理学研究, 対人社会心理学研究のアーカイブで, 「表情」, 「感情」をキーワードとして検索。2011年6月1日時点。

Conceptual examination of emotion-related terms in Japanese: In the psychological studies of expressive behavior

NAKAMURA Makoto

Abstract

The ambiguity and the uncertainty of emotion-related terms have been repeatedly pointed out in the field of psychology (e.g., Izard, 2010). In this article, the definitions and usages of emotion-related terms such as “kanjyo” and “jyodoh” in Japanese psychological studies were examined. It was found that the definitions of the terms were also ambiguous in Japan in the academic literature on emotion and the empirical studies on expressive behaviors. The usages of the emotion-related terms vary across the themes of the studies and the theoretical background of the authors. It was suggested that contextualization of studying emotion and repeated meta-analyses of the studies were important to improve accuracy and authenticity of the emotion research.

(2011年11月4日受理)